



第2章 人々の暮らしと自然

“むら”の暮らし



“村”の成り立ちと決まり

日本には、“むら”という地域のまとまりをつくって、共有している自然環境の資源を管理したり、決まりをつくってそのむらに住む人々をまとめたりするしくみがありました。昔は、むらの組織が村びとの生活のほとんどすべてを統制していました。田んぼの作業や山の仕事、海の仕事は、みんなが共有する資源を使うものでしたから、むらの人どうして決めた決まりがあり、これをまもって生活することがとても大切だったのです。決まりごとは、ときには人々をしるすこともありましたが、決まりをまもることが自然環境の資源を大切に使うことになり、むらの将来を考えることにつながっていたのです。

また、むらには“ウチ”と“ソト”（むらの中と外）を区別する風習がありました。悪霊を追い出し、疫病や災難がむらの中に入らないように、むらとむらの境目には、道祖神を建てたりしていました。

祭りや行事

今でも行われている祭りや、お盆に先祖の霊を迎えたり送ったりする行事も、村びとどうしてつくったしくみにもとづいておこなわれていました。春祭りは豊漁・豊作を神様に祈願し、秋祭りは豊漁・豊作を神様に感謝するためにおこなわれました。お盆には精霊迎え・精霊送りをしていました。精霊送りのときには、わらでつくった船にご飯やおかずをのせて、先祖の霊をあの世界へ送る習慣がありました。



精霊送りのようす

自然をどのようにとらえていたか



魚霊塔（両津大川）

人々は、山に入るときには、必ず山の神様に祈りをしてから入り、魚をとったら「魚霊塔」を建てて魚に感謝し、霊をなぐさめていました。魚にも人と同じ「魂」があると信じ、魚を供養することで、魚がまた喜んで人にとられるようになると考えていたのです。

このように、人々は、山や海、木や草などの自然環境には霊が宿っているという、素朴な信仰の心を大切にしていました。その霊からの恵みが、山菜や魚介類となって人々の生活を支えてくれていると考えました。そうした自然のとらえ方が、自然環境を大切にする生活のすがたをかたちづけていたのです。